

「私にできること」

佐賀県 唐津市立鏡中学校 1年 川添 真子

近年、日本で災害が増えている。今年も梅雨の時期に大雨による被害が全国各地で起こった。そこで私は、土砂災害について調べた。土砂災害は地震や大雨、雪崩が含まれ、様々な理由がある。私は熊本に住んでいた頃に地震を体験した。よく通っていた阿蘇大橋が熊本地震によって壊れたところをテレビで見て、大きな橋を壊すような土砂の脅威を知った。

まず、国での災害対策で、砂防ダムや法枠工などの対策をハード面といい、ハザードマップや避難訓練などのことをソフト面ということが分かった。ハード面では砂防ダムは砂防堰堤ともいい、働きとしては土石流が流れてきたときに谷の途中で受け止めて、ふもとまでいかないようにする。大水が出たときに流れの勢いを弱め、下流に安全に流すための溪流保全工と呼ばれるものもある。法枠工は、がけくずれの危険がある斜面をコンクリートのわくでおさえて、斜面をくずれにくくしているもので、擁壁工はくずれてくる土砂を受け止める壁や柵のことである。地滑りは長い杭を打つことが一つの策としてある。しかし、これらのハード面だけだと、私たちが自分自身を守ることができないと思い、ソフト面についても考えてみた。ソフト面では、ハザードマップで危険な場所や避難場所の確認をすることや、避難訓練をして、自分自身を守ることが大切である。自然災害に備え、私たちを守るためには公助だけでなく、日常的な備えとして自助も必要なことで、国民一人一人が日頃から自らの周りの災害リスクを知り、災害に対して十分な準備をしていくことが大切になっていく。災害では予測することや予防することを共有し、災害が起きた時の対応も必要とされている。この夏熊本で起きた大雨による土砂災害も土砂が落ちてくるかもしれないと予測することができていたら、早く避難ができ、けがをした人や亡くなる人を減らせていたかもしれない。ソフト面ではハード面ではできない「自分を自分で守ること」ができることが分かった。これらのハード面とソフト面それぞれ一つだけだと、それぞれでできることには限りがある。この、ハード面とソフト面がバランスよく機能し、活用していくことが必要ということが分かった。

いま私たちにできることは、国での土砂災害対策に対して協力的であることと、地域ごとである土砂災害対策を自分の目で確認し、災害が起きた時「どこに避難するか」「どの道を通ったら安全か」「逆にどの道を通ったら危険か」を確認し、その地域ごとにでた避難指示などの情報をもとにして自分自身を守る行動をすることである。私は、大きな災害を経験するまではハザードマップという言葉に対してはあまり重要さを感じておらず、あまりその意味も分かっていなかった。避難訓練も学校の一つの行事と考え、この訓練は現実では起きないことと考えていた。その避難訓練もハザードマップと同じように重要なこととして考えていなかった。災害を体験する前の自分はソフト面での自分自身を守れることができていなかったと考え、あらためてとても怖く感じた。しかし、地震や大雨を体験した自分は変わっていた。ハザードマップについて調べてみたり、自分が住んでいる地域のハザードマップを調べていって、学校の避難訓練では行事としてではなく、いつ災害が起きるかわからない、こういう時はどう行動すればいいかということを考えていたり、今までの自分でもわかって少し成長したように思った。他にも、災害経験後は、家族で災害があったときのことを話したりする機会が増えたと思う。私は、この前起きた西日本豪雨ではもともと住んでいた熊本がどんどん浸水していったり、いつも楽しく遊んでいた球磨川が見る見る間に氾濫していったりして、それをテレビで見たとき涙が出そうになった。その後、水が引いた後も被害が大きくなり、新型コロナウイルスの影響で、ボランティア活動にも行くことができず、とても悔しかった。これらの災害に向けて私は、自分にできることを考え、それを精いっぱい行動にうつしていきたいと思う。